

**未来に向かって成長しようとする資質・能力の育成
～学習者主体の学びを実現する授業づくりを柱にして～**

三島村立三島片泊学園

1 研究のねらい

本校は、極小規模校であり、同学年の児童生徒がいない学年があったり、同学年の児童生徒がいても少人数のため、多様な意見の交流ができなかったりするという課題がある。また、昨年の「校内アンケート調査」や「鹿児島学習定着度調査」の結果に注目すると、主体性の低さや自己肯定感の低さ、自分の学習を調整しようとする意識の低さが明確になった。

そこで、主体的に学べる授業づくりをしたり、児童生徒が自分の思いや考えを表現する機会をたくさん作ったりしながら「学習者主体の学び」を実現する取組を日々行うことで、児童生徒が生き生きと過ごし、未来に向かって成長しようとする資質・能力を育てることができると考えた。

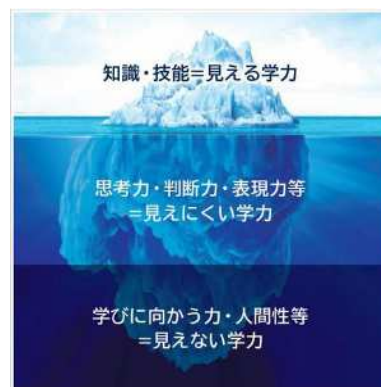
2 研究の概要

本校では、未来に向かって成長しようとする資質・能力を育成するために、まず学校生活の基盤である授業づくりを柱に置いた。特に、本校の課題である自己肯定感・主体性の低さを起因とする「学習に対する受け身の姿勢」を改善するために、「学習者主体の学び」を実現する授業づくりを行うことが不可欠だと考えた。その中でも、『目に見えない学力（非認知能力）』を高めることを最重要課題として実践に取り組んだ。また、授業以外でも、できるだけ自分の思いや考えを表現する機会を増やすために、様々な取組を行った。

3 研究の内容

具体的には、以下の実践を通して、学力の向上を図った。

(1) 学習者主体の授業	ア 単元を見通した課題設定 イ 協働的な学び ウ 自己調整学習 エ 振り返りの充実
(2) 生徒会活動	ア 得意発表 イ 運動会の予告動画作成
(3) その他の活動	ア 本読み作文 イ 本も友だち 20 分間運動



【氷山モデルから見る学力の3要素】

（梶田徹一氏の学力モデル（1994）から引用）

4 研究の実際

(1) 学習者主体の授業

それぞれの学年や教科ごとに目指す子供の姿や目指す資質・能力を育むための取組を行った。

ア 単元を見通した課題設定

- ・ 新しい単元が始まる前に、全体計画・時数・学習内容等を配布し、自分で学習計画や学習目標を作成させ、児童が単元を見通して学習が進められるようにした。（6年生・社会科）
- ・ 単元を通した「めあて」を設定し、調べ学習を進め、最終時にはそれまで学習して分かったこと等を新聞形式でまとめていった。また、1単位時間の内容を小見出しごとに分担して調べることで、1つのことを深く調べることができた。（後期課程生・社会科）

イ 協働的な学び

- ・ 国語科で長文教材を扱う際は、初発の感想や分からない内容、一緒に考えたいところなどを課題として自宅で取り組んでから授業を行った。また、授業では、司会や記録者という役割を与えて生徒主体の話し合いを行いながら、課題を解決していくようにした。（後期課程生・国語科）

- ・ 理科の実験の際は、司会者を立てて実験の予想や実験方法を検討させた。また、データ収集や結果の導き出しは、生徒主体で行い、教師は補助的役割を担った。（後期課程生・理科）
- ・ 英語の英文作成では、前時のうちに、学習目標や学習課題を提示し、家庭学習の際に予習を行うことで、協働的な活動を行う時間を増やし、他者との関わりの中で学びを深めることができた。（後期課程生・英語科）



【協働的に学ぶ様子】

ウ 自己調整学習

- ・ 毎時間、振り返りシートを用いて、「学習計画」の修正、学習目標の記入、振り返りを行いながら、単元内自由進度学習を行った。（後期課程生、数学科）
- ・ 単元ごとにワークシートを作成し、毎時間に個人のめあてを立てさせたり、その振り返りをさせたりした。また、運動のコツなどについても記録させ、次時以降の学習につなげた。



【ワークシート】

エ 振り返りの充実

毎時間、振り返りシートに記入したり、確認したりする時間を設定した。全職員で観点や記述の項目をそろえ、教科や学年に応じて取り組んだ。また、運動会などの行事でも振り返りを行うようにし、教育活動全般を通して、非認知能力の向上を図った。

①何がわかったか。(わからなかったか)、何ができるようになったか。(できなかったか)
②どのようにしてわかったか。(できるようになったか) (何に注目してわかったか)
③これから(次の時間) どうしたい(なりたい)か。学びをどのように生かしていきたいか。
① have to と must の使い分け方がわかった。
② 友達と相談して分かった。
③これから(次の時間) は、 have to と must の使い分けをもっと早くできるようにしたい。

【振り返りシートの記述】

(2) 生徒会活動

- ア 自己肯定感を高める場として、年間を通して、個々の児童生徒がみんなの前で「得意発表」を行う機会を設定した。
- イ 運動会に向けて意欲を高めるために練習の様子などを盛り込んだ「運動会の予告動画」を作成し、運動会当日に地域の方々や保護者が鑑賞できるようにした。



【得意発表の様子】

(3) その他

- ア 月1回、PTA 主催の「本も友だち 20 分間運動」を実施し、保護者と一緒に全員で一斉に本を読む活動を行った。活動の最後には、児童生徒が自分の好きな本を紹介する時間を設けた。
- イ 教科書の文章や自分が書いた作文を音読し、地区放送で流して保護者や地区の人たちに聞いてもらう活動を行った。

5 研究のまとめ

(1) 成果

- ・ 「未来に向かって成長しようとする資質・能力」を高めるために様々な取組を行い、その結果、「学校は楽しい」と思える児童生徒が増え、自己肯定感が少しずつ高まってきた。
- ・ 学習者主体の学びを実現する授業づくりを職員全員で取り組むことで、自ら課題を見つけ、見通しをもって学習を進める力が身につき、主体的に学ぶ姿を見取ることができた。

(2) 課題

- ・ 振り返りを記述することに時間がかかりすぎる児童生徒や、個別に見ると自己肯定感が低い児童生徒が見られた。

6 今後の取組

今回の実践で育まれた「見えない学力」を他の学力につなげる手立てを模索していきたい。